特別賞

多種多様性～命溢れる地球を守るために～

赤坂中学校　宇野澤　拓海

４０億年前、太古の海に生物が誕生して以来、進化、競争、淘汰を繰り返し、今や１０００万種類ともいわれる生物が地球上に存在している。このように多くの生物が共存していることを生物の多種多様性という。しかし、近年１７００種が絶滅の危機に直面している。どうしてこのようなことになってしまったのか。僕たちにできることは何かを考えてみた。

２００３年、日本最後の野生のトキが絶滅した。トキは奈良時代には食用として乱獲、江戸時代には畑を荒らす害鳥として駆除され、徐々に数を減らしていった。そして近年では佐渡で生息が確認されたが、佐渡での過疎化が進み、農業の人手不足が深刻で湿田の手入れが行き届かずに森林化してしまい。終に野生のトキは絶滅してしまった。この話を聞いたとき、僕は森林も自然に違いないのだから、問題ないのではないかと思っていた。

しかし、トキは湿田の中にいるドジョウ、サワガニ、カエル等を餌にしていた為に湿田の森林化は死活問題だったのである。

ここで僕は農業を見直せないかと考えた。農業を支援する体制を整えれば、湿田もなくならず、自然や生物が守られる。僕たち消費者も「地産地消」を心がければ、自給率が上がるので、わざわざ外国や遠地から食料を多く輸送する必要がなくなる。そうすれば、輸送の際に使用する飛行機や船の石油の消費、CO_2排出の発生も削減することが出来る。その結果、温暖化や水質汚染等にも多少の歯止めがかかり、トキだけでなく、北極に住む生物、深海に住む生物をも守ることに繋がるだろう。

それから、多様性を脅かす原因として外来種の増加があげられる。東京都と神奈川県の間を流れる多摩川は一部の人に「タマゾンガワ」と呼ばれているという。ペットとして飼われていたグッピー、アロワナ、ピラニア等の外来種が放流されて、在来種である鮎やフナを脅かしているのである。ちなみに、これら外来種が棲めるようになった背景としては下水処理水の影響もある。多摩川は約６０パーセントが下水処理水と言われ、家庭から流れる温水で熱帯魚にとって越冬しやすい環境になったのである。人間の都合でブームによって乱獲され、ペットとして飼育し、飽きたら捨てる。処分にもてあまし、川に捨てた人は「自然に帰した」といい気分でいるのかもしれないが、自分の身勝手によって在来種が危機に晒されている事まで考えが及ばないのであろう。また、夏でも汚れが落ちやすいからと安易に温水で食器を洗ったりすることも環境や生物体系を壊していることを忘れてはならない。

その他、最近「熊が人里に出没」「蜜蜂がいなくなり、果

物園打撃」など直接人間に関わってくるニュースも数多く聞かれるようになった。環境破壊によって人里に下りて餌を求める熊が民家を荒らす、受粉の役割を果たしてくれる蜜蜂が減少してしまう。こうしたことも人間に何か警告を発しているような気がしてならない。人間の都合によって、絶滅した生物は二度と蘇らない。今こそ、出来ることを一人一人が実践していく時である。かけがえのない生物、命溢れる地球の未来を守るために。